

やぶちゃん版芥川龍之介詩集



(注) copyright 2007-2014 藪野直史

「やぶちゃん注」本編は以下のような編集方針を採った。但し、

・各底本中の定型の短歌・旋頭歌（以上は書簡・手帳所収のものを除いて、私の「[やぶちゃん版編年](#)

[体芥川龍之介歌集](#) [附やぶちゃん注](#)」に収録

・俳句形式のもの及び私が「やぶちゃん版芥川龍之介全句集」（全四巻）で自由律俳句と見なして収

録したもの

は含まれていない（後者の全句集は「[やぶちゃんの電子テキスト集](#)・[俳句篇](#)」から赴かれない）。

I まず最初は底本として岩波版旧全集を用い、その第九巻巻末の「詩歌」の部の冒頭から「雑」迄、順次、定型非定型を問わず、韻文及び散文詩と思われるものを抽出して並べてみた。但し、「洞庭舟中」のみ特殊な採用をしたので、該当詩の後注を参照されたい。

II 次に岩波版新全集第二十三巻を用い、その「詩歌未定稿」の「詩」の中で、旧全集の「詩歌」に所収していないものを抽出し、それらの二十数篇をすべて詩集前半に配した。これは該当詩の最後の二つ「わたしのしたことを」「夜だけは僕を」を除いてそれらのほとんどが前記旧全集詩群より以前に創作された可能性が高いためである。但し、冒頭詩「われ目ざむ」の注でも述べた通り、

漢字表記については岩波書店一九六八年刊葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」に所収するものはそれと校合し、正字若しくは正しいと判断される新全集が記すところの異体字を採用、それ以外の新全集のみのものは私のテキスト・ポリシーから恣意的に正字に直した。

Ⅲ 続いて、岩波書店一九六八年刊葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」の「詩」のパートに所収するもので、新旧全集の「詩歌」の部分に所収しない詩十五篇を採録した。これらは恐らく新旧全集の書簡及びノート類のパートにあるものと思われるが、現在、それを精査する時間がない。

客観的な不備や自身の不満もあるが、以上を以つてとりあえずの「やぶちゃん版芥川龍之介詩集」の体裁は整ったと考えている。

最後に申し述べておくと、これを「芥川龍之介全詩集」に近づけるためには、これから全作品中の詩（例えば「詩集」の中の「夢見つつ」の詩）及び書簡及びノートの総覧が不可欠（実際、ちょっと棲開いてみても多数散見される模様）であり、また佐藤春夫の「澄江堂遺珠」という労作もあり（このソースは旧全集「未定詩稿」底本と同じものでありながら、「澄江堂遺珠」と底本とを比較して頂ければ分かると思われるが、「澄江堂遺珠」の方が遥かに上質である。底本の未定稿編集ははつきり言ってやっつけ仕事としか思われず、杜撰の極みで、本文の欠字部分の指示さえもない。私には本資料は別個なものとして扱うべきと思っており、今後の増補の課題としている。「未定詩稿」冒頭注を参照のこと）、また新全集は新字採用ではあるものの、その「澄江堂遺珠」の関連資料を所載している（しかし資料であるため大変読みにくい）等々——であるからして、今のところ、この「やぶちゃん版芥川龍之介詩集」は「全詩集」では毛頭ないことを断っておく。

活字の大きさは各底本にはよっていない。一部の詩に注を附した。

今回、PDF化に際し、以上の前書を一部書き換え、注も増補した。また、変換ソフトの限界性から一部の正字及びその正字を含む文字列が横転している箇所がある。また、「廻」の正字は表記出来ないのので、仕方なく「廻」で表記している。御寛恕願いたい・【二〇一四年十二月日】

われ目ざむ

われ 目ざめて
わが周囲を顧る
忽 大いなる光あり
來りて われを打つ
われ 問ふ
誰ぞ 汝は
荅ふ
われ 常に 汝と共にあり
何故に 誰ぞと云ふ
われ 光と共に 歩し
光 われと共に 歩す
わが心 病み
わが足 疲れたり
われ 仆る
われ 死す
死して われ
光と共にあゆめる

「やぶちゃん注」底本は新全集に拠った。以下の新全集底本の部分は山梨県立文学館所蔵資料の出版物「芥川龍之介資料集・図版1・2」に基づいた詩群である。但し、冒頭注に述べた通り、漢字表記については岩波書店一九六八年刊葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」に所収するものはそれと校合し、正字若しくは正しいと判断される新全集が記すところの異体字（例えば本詩の七行目冒頭の「荅」は、「未定稿集」では「答」であるが、新全集の「荅」をとった）を採用、それ以外の新全集のみのものは私のテキスト・ポリシーから恣意的に正字に直した。以下、この注記は煩瑣なので略す。後記によると大正三〜四（一九一四〜一九一五）年頃の創作と推測される、とする。」

詩二篇

佐伯三郎

焚書坑儒

天が下の書を焚く煙
ひもすがら

たなびくなべに

咸陽の天日くらし

そを見ると

たたづみおはす

始皇帝 従ふは李斯

「いかなれば

書を焚き給ふ」

こと問へばうち笑ひ

「書の數ぞ

あまりに多き」

龍顔もはれやかなりや

時しもよ

煙にむせび

ひかれゆく囚人めしうじあまた

これやこの

坑せらるべき

天が下の儒とこそは知れ。

「などてかく

儒を埋めたまふ」

あながまと始皇帝

李斯に背を

見せつつ荅ふ

龍顔も今こそくもれ。

さればとよ

四海九州

EPIGONE あまりに多し」

尾生の信

たそがるる溜橋の下に
來む人を尾生ぞ待てる。

橋欄ははるかに黒し

そのほとりとぶは蝙蝠

いつか來むあはれ明眸

かくてまつ時のあゆみは

さす潮の早きにも似ず

さ青なる水はしづかに

履のへを今こそひたせ

いつか來むあはれ明眸

足ゆ腰 腰ゆふとはら

漫々と水は満つれど

さりやらず尾生が信

月しろも今こそせしか

いつか來むあはれ明眸

わが才をわれとたのみて

いたづらに來む日を待てる

われはげに尾生に似るか

よるべなき「生」の橋下に

いつか來むあはれ明眸

「日本の本の子」

「やぶちゃん注：この題名は底本では下部に「仮」とあり、編者による仮題である。ないのも不自由なので「」で括って示した。」

日本の本の子ぞわれは

上下に小さくして

靴もげにはきのよろしく

鼻眼鏡なこそ落ちねと

河船のもそろもそろに

練るや今 銀座の衢ちまた

「傳統」の敷石ふみて

月代さかやきのあともつめたく

さしかざす日傘はあれど

くゆらすは埃及煙艸

「やぶちゃん注：底本は新全集に拠った。後記によると以上三篇は初期の創作と推測される、とする。「佐伯三郎」は芥川龍之介のペンネームであろう。底本には後記で記されているが、雰囲気を出すために標題の傍に掲げた。「焚書坑儒」の末尾の始まりの鍵括弧はない。「未定稿集」では脱落・異同がある代わりに、最初の鍵括弧はある。即ち、

「やればとよ

EPIGONEN あまりに多し」

と「四海九州」の一行がなく、「さればとよ」の行頭に鍵括弧の始まりが附されている。

「EPIGONEN」の綴りの違いがあるが、「EPIGONE」など英語「EPIGONEN」などドイツ語として正しい綴りではある。

また、「尾生の信」の第三連冒頭は、「未定稿」では、

足ゆ腰ゆ ふとはら

であり、同じく第四連冒頭は、

わざ才たかをわれとたのみて

となつてくる。」

體 驗

かすかなる光と影とに
あふれたる海べにたちて
わが心 おののきつゝ 禮拜すれば
當來の期待にみちたる
風ありて わが周圍をながれ
生活は琥珀のごとく
かゞやきつゝ 空にのぼらむとす Ich
この時 わが心
神話のごとく 手をのばして
生活の日をとらへ
霧におくはれたる 下界に
その光を與へむとすれども
はるかなる空より
禿鹿の聲おち來りて
わが心をおびやかせば
おのゝきて ふたゝび 禮拜し
わが心はおのゝきて たゝづむ
當來の期待にあふれ
かなたなる海をまもりて――
かすかなる輝きと
かすかなる影にみちたる
「生活」のあしたにたちて
ながれゆく「時」をわすれ

「やぶちゃん注」底本は新全集に拠った。後記によると初期の創作と推測される、とする。]

グレコ

燃え立ち

燃え立ち

クリストは 上りゆけり

見よ 手に 三角の旗

紅に 金を焦がせば

足を空に 空を頭に

暗に燃ゆる 肉身

下なる 人々の

立ち 俯し 禮拜する上に

爪立ちつつ

身ぢろぎつつ

クリストは 上りゆけり

浪はゆるる 孔雀の羽

光まばゆし

たたなはる 岩の鋼鐵

空にまく 銅の粉末

かたむく日に かがよふ

火龍を待つ 牲の女人は

白しとも 白し

浪はゆるる 孔雀の羽

たちまち

空間をまろびて

おとしくる 騎士あり

(聖なりや 愛慾)

馬は 溝泥とろどろの紫

肉紅の旗

さざげ持つらし

拍車にいま

きしめく風

光まばゆし

「やぶちゃん注：底本は新全集に拠った。後記によると初期の創作と推測される、とする。」

藝術の爲の藝術

空はいま繻子の青みに

ほのかなる薔薇さうびの月を

かるがろとうかふるけはひ

たそがれは指もつめたく

はるかなる人をおもふと

さしくめばうすき光に

ものみなほ耗繻子の青みを

ほのかなる薔薇の月に

かるがろとしづむるけはひ

「やぶちゃん注…底本は新全集に拠った。後記によると初期の創作と推測される、とする。」

樹木

あらゆる点と線と 而して面と
交錯し 散在し 集合する中に
樹木は ひとり顛動しつゝ
無窮に向つて
垂直なる幹を のばさんとす
動揺すれども 静止し
流轉すれども 變ぜざる
一切を 輕蔑しつゝ
樹木はひとり 綠なる枝に
金の^{きん}日を抱きて
限りなく 生長し
更に 限りなく 生長せんとす

「やぶちゃん注…底本は新全集に拠った。後記によると前の『藝術の爲の藝術』と同じ用紙に、それに続く形で記されている。『資料集2』に「KIKAWA1915」のサインで描かれている「スケッチブック8」の絵と関わる詩、とも見做される。』とする。『資料集2』とは、「われ目ざむ」の詩の注で示した山梨県立文学館所蔵資料の出版物であり、この絵は勿論、芥川龍之介の盟友、井川恭の描いたものである。」

海

窓の外の海では、

三角の波が、起伏してゐる。

己のおやちを殺した海である。

そればかりではない。

己の兄も、己の弟も、

みんな、あの海で死んだ。

その仇かたきの海を、

己は、戀人のやうに愛してゐる。

何故か、それは知らない。

檣ほしひの針を打たれて、つぶやいてゐる海を。

窓の外の海では、

三角の波が、起伏してゐる。

(二五・九・一六)

「やぶちゃん注…底本は新全集に拠った。後記によると『J・M・シング（一八七二―一九〇九年）の「海へ騎りゆく人々 Riders to sea」（一九〇四年）に基づいて創られた、と推測される。シングの同戯曲は、井川恭が「海への騎者」と題して一九一四（大正三）年の「新思潮」六月号に訳出している。』とする。」

情話

おさんにすてられた茂兵エがね。
中折をまぶかにかぶりながら、
東洋の LONDON 東京の往來を、
ぶらぶら歩いて行つたとき。

これが 雪の日でね。
飾り窓の中には、

XMAS-TREE に燈がこつこつ、
ニコライの鐘が 鳴つてゐる。

茂兵エは 傘もささないで、
おさんのあるレストランの、
硝子戸の前を 行つたり來たり、
何度となく 歩いてゐるとね。

中で球を撞たいてゐたお客がね。
こんな事を云つたとき。

「かう株引界の景氣がよくつちやあ……
ETC. ETC. ……」

諸君は その時おさんが、
何をしてゐたと思ふ。

それは 到底 諸君にはわからない。
何故と云へば 僕も知らないから。

唯 茂兵エは かう思つてゐる。
「おさんは 泣いてゐる。」とね。

——東洋の LONDON 東京の往來では

雪の中を 芝居の太鼓が鳴つてゐる――

(一五・九・一六)

「やぶちゃん注：底本は新全集に拠った。二箇所の「東洋の LONDON」の後の有意な字空けはママ。後記によると、『大経師昔暦』を現代に生かそうと試みた作品であろう。』とある。「大経師昔暦」は(だいきようじむかしごよみ)と読む。近松門左衛門作の世話物の浄瑠璃。京都の大経師(表具師)以春の妻おさんが手代の茂兵衛とが通じ、二人で丹波に逃れたものの捕えられ、仲介をした下女お玉共々、処刑された事件を脚色した。劇では二人の不義を偶然の積み重ねとして描き、同情的で、結末も大団円とする。近松三大姦通劇の一つ。「おさん茂兵衛」の呼称で有名。」

夕は ほのかなる暗をうみ
暗は ものおもふ汝をうむ
汝の髪は 黒く
かざしたる花も
いつとなく 青ざめたれど
何物か その中にいきづく
かすかに
されど やすみなく……

「やぶちゃん注：底本は新全集に拠った。旧全集の井川恭宛大正四（一九一五）年十二月三日付の
一八九書簡に、やや表記を変えてこの詩が現れるので、以下に引用する。こちらは無題である。井
川との松江の思い出に深い懐旧の情を綴り、まず次に掲げてある詩作品「樹木」に相当する詩（や
や表現に異同あり）を挙げ、自作の漢詩を記した後、「どうも出来上った時の心もちが日本の詩より
いゝ 日本の詩も一つ今日つくつたのを書く 何だかさびしい氣がした時書いた詩だから」と記し、

夕は ほのかなる暗をうみ
暗は ものおもふ汝をうむ
汝の髪は 黒く
かざしたる花も
いろなく青ざめたれど
何ものか その中にいきづく
かすかに
されど やすみなく――
夕はほのかなる暗をうみ
暗はものおもふ汝をうむ

その後にも松江への飛ぶような思いが語られ、六首の自作和歌が続く。この書簡は大変長く、芥川
龍之介の感性的な書簡として一読忘れ難いものがある。」

樹木 一九一五・一一・一六

樹木は 秋をいだきて

明るき 沈黙にいざなふ

「黄」は 日の光にまどろみ

樹木は かすかなる呼吸を

日の光に とかさむとす

この時 人は 樹木と共に

秋の前に うなだれ

その中に 通へる

やさしき「死」を よろこぶ

「やぶちゃん注」底本は新全集に拠った。前の「戀人」の詩と同じく、旧全集の井川恭宛大正四（一九一五）年十二月三日付の「一八九書簡に、やや表記を変えてこの詩が現れるので、前後の消息文を含めて以下に部分引用する。こちらは無題である。本書簡については前の「戀人」の注を参照されたい。

田端はどこへ云つても黄色い木の葉ばかりだ 夜とほると秋の匂がする

樹木は 秋をいだきて

明るき 沈黙にいざなふ

「黄」は 日の光にまどろみ

樹木は かすかなる呼吸を

日の光に とかさむとす

この時 人は 樹木と共に

秋の前に うなだれ

その中に 通へる

やさしき「死」を よろこぶ

子規の墓のある大龍寺にも銀杏の黄色くなつたのがある 生垣の要もち それから杉 それだけが
暗い緑をしてゐる あとは黄いろばかり その路を大根をつんだ車がとほる 籠の中へ黄菊ばかり

掬んだ入れた車が通る 車の輪の音 子供の赤蜻蛉をつる歌（氣をつけてきいてみると歌の語はちがふが節は出雲の何とか云ふ妙な歌「あぶらやおこんにまけてにげるはぢぢいやないかいな」と同じだ）百舌の聲（こいつは時によると馬鹿にたくさん来る）——あとは静だ 時々王子へ散歩にゆく 小川、漆紅葉、家鴨、さうして柿をかつて来る

以下、先の詩の注に記したように、漢詩、「戀人」相当詩と続く（冒頭の消息文中の「云つても」の「云」はママ。また後続の消息文の「籠の中へ黄菊ばかり掬んだ入れた車が通る」は、改行してすぐ「車の輪の音」に続いているが、私の判断で一字空けた。」

性慾 一九二五・一一・一八

—金いろの三日月。

—高い森の木が 三角な 細い屋根を 空の下で 造つてゐる。森は 天鷲絨。空は黒繻子。その上に 金いろの三日月。

—その森の中で 踊りをおどる うつくしい女たち。女たちが踊れば 影も踊る その上に 金いろの三日月。

—誰だ。その時 森の奥から 魔の皮をかぶつて はつて來るのは。皮をぬげば

「やぶちゃん注…底本は新全集に拠った。第二連めの最後は底本では「その上に」で改行され、「金いろの三日月。」が次の行頭にすぐ続いている。第一連から推測して一字空けとした。」

ワグネル

一九二五・一一・一九

霧ふりて やまざれば
幽藪は 眼をとち
思想は 海のごとく
その聲をあげむとす
その時 霧よりも なほ
灰色なる 髪をみだし
海よりも なほ
青き眼に
永劫の面を仰ぎ
たちのぼる 水けむりと
大いなる聲との中に
あへぎつゝ
また おののきつゝ
黄金わうごんの太陽を
抱いだきて
さけばんとする 「神」あり
海は その「神」の胸に
くだけ
聲なきけむりとなりて
立上り
霧は その「神」の肩に
なだれ
色なき水となりて
あふれ
みなぎれる 霧と海とに
太陽も
その光を 失はんとす
その時 地は

この「神」の力を畏れ
老いたる 頭を垂れて

永劫の前に
ひれふせば

その響 ふるへ 動きて

火龍を その眠より醒まし

半人半馬神を

その森より 逐ひ

妖女を

その泉より 放ち

而して あゝ

大いなる 牧羊神をも

その谷より

逃れしめたり

見よ 天も

この「神」の前に おののき

さかしまに 身を傾くれば

なべての星

空を迂りて

たちのぼる霧と 海との中に

雹の如く そゝがんとす

「神」は なほ

その髪より

むらがれる 闇をふるひ

その眼に

永劫の面を仰ぎ

たへず 働きつゝ

忙しく

黄金の太陽を 抱きて

混沌の中より――

一切を

生み

育はぐまんとする 苦痛の中より

その「世界」を

造り来れり

霧ふりて やまざれば

幽鬱は 眼をとち

思想は 海の如く

その聲をあげむとす

「やぶちやん注…底本は新全集に拠った。「半人半馬神」のルビからはドイツ語のそれ「Zentaur」を、また「妖女」もドイツ語で「女性の水の精」を表わす「Nixe」（ニククセ）であろう。「牧羊神」はドイツ語も英語も「Pan」であるが、ワグネルを詠ったものであるから、これもドイツ語である。」

仙人

仙人は 丹爐の前に うづくまりて 石を點じて 金と なす術を學べるなり その傍に 虎は
まどろみ やすみなき瞳に かなたなる夜を うかゞふ

火は丹爐に 燃えて やまざれど 石はなほ 石なり 梁うつはりにねむれる龍の 角よりもなほ
いやしく みにくき 石なり

仙人は 安からず 太玄の書をよみ ひたすら 丹爐の火を 守れども かひなし たゞ 虎の
み やすみなき瞳に 仙人の肉をうかゞふ

「やぶちゃん注：底本は新全集に拠った。第二連目の「石はなほ 石なり」は底本では「石はなほ」
で改行され、「石なり」が次の行頭にすぐ続いている。同連最後の「みにくき 石なり」の一字空け
の強調表現から推測して一字空けとしたが、これは連続したものであるかも知れない。後記による
と、大正二五（一九二五）年頃の創作推測される、とする。」

山上

雲は谷に沈み

夕暮の針葉樹は

ひっそりと枝を垂らしてゐる。

鳥ももう噂かない今

おれは岩に腰かけながら、

安らかに死を思ふ事が出来る。

「やぶちゃん注…底本は新全集に拠った。岩波書店刊葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」には、本詩は題が「山の上」とあり、『大正元年—大正三年頃』と記す。」

「秋がすべての上にあつた」

「やぶちゃん注：この題名は底本では下部に「仮」とあり、編者による仮題である。ないのも不自由なので「」で括弧して示した。」

秋がすべての上にあつた

銀杏は 眼のさめるやうな鮮な黄いろい葉を 椽は底光りのする古い金きんのやうな黄いろい葉を
鈴懸はうすい漆をかけたやうな光澤つやのある黄いろい葉を それぞれ ほのかな霧の下りた空につけ
て 静に 眼に見えない何物かが来るのを待つてゐる それらの落葉樹がつくる明るい静な團欒の
中には 唯 ヒマラヤシイダアの暗い緑ばかりが かすかな反抗の氣はひをしめしてゐるが それ
さへ近づいて来る黄昏の両手に抱かれて おぼつかない夕闇のかげに消えてしまひさうである。こ
の中を二すぢ通つてゐる路は それでもまだ落葉にうづもれずに 木と木との並んだ足もとに つ
つましく濡れた砂利をならべてゐる。人の氣のつかない内に低い空から雨がふつて来て その雨が
又 人の氣のつかない内に通りすぎてしまつたのであらう。

自分はその路をしづかに歩いてゆく。……すると自分の傍をやはりしづかに通りぬけてゆくもの
がある。形も影も自分の眼にははいらぬ。唯 路の両側にある木が 動くともなく動きつづやく
ともなくつづやくやうに思はれる。木には自分の傍を通りぬける秋が見えるからであらう。いや、
見えるのは木にばかりではない。その木の向ふにある他の中では蒼鷺がそれを見た。そして 鱗び
ある聲で二聲啼いた。

「やぶちゃん注：底本は新全集に拠つた。二段落目の「それぞれ」はママ。」

菊

ここでは すべてが明い。——その明い中に 雲とも霞ともつかないものが 遠くの方になびいてゐる。これにも 影と云ふものは まるでない。その向ふに 山があつて その山が又これに遮られてゐなかつたら 誰もさう云ふものが 搖曳してゐるとは思はない程の明きである。山は丁度 腕をふせたやうに 圓い。ここだけはあらはな光が和げられて、山全體がほんやりした輪廓を 思ひ出したやうに無地の空へうき上らせてゐる。見た所では 山があると云ふ氣がしない。唯 どのかの山の影が 彷彿としてここへうつつて來たやうに思はれる。

その山からここまでは 十歩をへだてゐるか 十里をへだててゐるか それを知つてゐる者は一人もない。しかし ここには短い籬かきがある。さうして その籬の下には 黄菊が澤山さいてゐる。色は その香かほりのうすいやうに うすい。ほがらかにさす秋の日さへ 影をおとさない國では 菊ももうすい黄を 簇る花の蕊くさねに つつましくつつんでゐるからであらう しかし菊は 籬の下に 細い幾すぢの莖をみだしてゐるばかりではない。

「やぶちゃん注…底本は新全集に拠つた。後記によると初期の創作と推測される、とする。」

金剛石

金剛石は晴天の水である。或は又瞬かない星である。産地は天竺が最も多い。天竺の山々の奥には、方一里の金剛石が、まるで天上の湖のやうに、横はつてゐると云はれてゐる。その金剛石の面を透かして見ると、獅子の向うに住んでゐる無数の白象、無数の獅子、無数の孔雀、無数の天女が、鏡に映すよりもはつきりと彷彿されるときも云はれてゐる。金剛石はその上鐵よりも堅い。これを二つに切る事は、夜叉の牙にも不可能である。尤もまだ暖い水牛の血に浸しさへすれば、粉な々に碎く事もむづかしくはない。金剛石を持つてゐるものは、肥り肉の女を自由にする事が出来る。脂のやうに色の白い、髪の毛がやや硬めな、唇のふつくりした、目なじりの切れの長い、鼻すぢの厚みがある、黒眼が漆のやうに粘ねんばりした、大柄な女を誘はうとするものは、何よりもまづ金剛石を肌身につけてゐなければなるまい。

「やぶちゃん注…以下「顔」までの八篇（「古風二首」を一篇と数えた）の底本は新全集に拠った。底本はこれらをセットとして後記で纏めて注している。それによれば、総てが大正九（一九二〇）年の執筆と推定されてある。取り敢えず、標題と詩柄から最初の三篇は連作と採つて並べることとした。」

眞珠

眞珠は曇つた空、甕底かめぞこの乳、凋れた百合、晝の月、或は霍亂の白眼である。産地は支那の海が最も多い。其處の暗い水底には、大きな蛤が澤山あつて、その蛤の口の中へ、墮落した天使の涙が落ちると、眞珠になるのだと云はれてゐる。眞珠を持つてゐさへすれば、背のすらりとした、痩せぎすの女を自由にする事はむづかしくない。この寶石

「やぶちゃん注…この寶石」で稿は断たれている。」

紫水晶

紫水晶は日暮の空、葡萄酒の澱滓おり、摘んだ葦、春さきの溝泥、牝豚の心臓、或は死人の脣である。産地は天竺が最も多い。其處の深い谷底には、舌を凍らせる泉が湧き出てゐて、その泉の溢れる中へ、墮落した天使の血が落ちると、紫水晶になるのだと云はれてゐる。

古風二首

一

さわなりや 醜しこの批評家
立ち迷ふ狭霧の中に
怪形けけうめく蛾の群なして
かにかくに、さかしら云へど
わが戀ふる小説作者——
ぬば玉の夜空に澄める
金星のなか落つべき
榮はえありや 一なる才子
わが戀ふる小説作者

二

肥らまし いでのまん
ソマトーゼ あるは次亞憐
されば今、あるにかひなし
一瓶うまの甘し三鞭、
かく云ひて人は捨てけん
癡れ人に心なとめそ
わが戀ふる小説作者

怪談

午後十二時。

東京日本橋。……

醋の匂、飯の匂、魚の匂。

その中に動く二つの手。

汗ばむ飯。腐る魚。さかな

手は握り、又握る、

※の鮓、鮑の鮓、鮪の鮓、

穴子の鮓、比目の鮓、白魚の鮓。

伸びる指、縮まる指

飯は魚を抱き、魚は飯を蔽ふ、

鮓の吐息、鮓のぬめり、鮓の歎き、

鮓の光、鮓の呻き、鮓の身動き。みぢろ

酢の匂、飯の匂、魚の匂、

何だ、此處に浮び上るのは？

番茶の煙に浮び上るのは？

無数の鮓の動き止んだ上に

何時か瞬かない顔が一つ……

「やぶちゃん注：第三連三行目の最初の「※」は、左側の「魚」(さかなへん)のみが記され、右の(つくり)が空白。「未定稿集」では普通に「魚」とあるが、恐らく何かの魚種を示す漢字を書こうとして、芥川が当該字が不明であるか、最初に持ってくる魚種を留保したのであろう。「身動」の「みぢろ」のルビはママ。「未定稿集」は正しく「みぢろ」。後掲する「鮓 ballade」はこれを散文詩化したものである。」

「われは愛づ」

「やぶちゃん注：この題名は底本では下部に「仮」とあり、編者による仮題である。ないのも不自由なので「」で括弧して示した。」

われは愛づ 古き鏡を

また紙の黄はめる書かみを

蜘蛛の圍のかかれる破風を

水絶えし噴き井の石を

枯れ枯れに乾ける薔薇を

手ずれたる椅子を 卓たけを

色褪せし更紗の布を

光なく錆びたる劍を

思ひ出も遙けき戀を

遠き世に廢れし歌を

さればわが詩集の中に

目ざましき「今日」けふをな求めそ

此處にあるものはことごと

骨董の店の挨に

忘れし「昨日」の紀念かたみ――

阿蘭陀の茶碗の花と

筒長きモーゼル銃と

臃めく司馬江漢が

銅版の森の下枝と

法朗西フランスは路易ルキの帝みかどの

知らしけん御世の囃はなと

燭臺と 切子硝子と

絃いともなき胡弓と 笛と

羽蒲團はに糸もほつれし繻子すいも

刺繻はりの百合と

硯屏と 五經ごけいや祕めし

漆さへ塗げたる書笥と
サムライの陣笠のみぞ

よし、さらば聞きね 人々

をちかたの狭霧の中に

消^けなんとす浪の歎かひ

あるはまた夕づく空に

缺けそめし月の寂しさ

此處にこそ昔心は

絶え絶えに哀れを語れ

よし、さらば聞きね 人々

中世の秋ゆとひ來し

かすかなる角笛の音……

春の夜

波白し

夜半の常磐木

春なれば

月も花やぐ

常磐木のしだるる陰に

女人われ

波音に知る

春の夜の佛陀の歎き

顔

わが顔は似たり 銀貨に

月よりも蒼む寂しさ

さて買ふは男爵夫人の名と

歎きつつ 鏡をとれば

月よりも蒼む寂しさ

わが顔は似たり 銀貨に

「やぶちゃん注：「男爵夫人」^{バロネス}男爵に相当する爵位（baron）の女性形（baroness）で、イギリスの制度では男爵の妻（男爵夫人）や男爵の爵位を女性（女男爵）に用いる。ウィキの「男爵」によれば、本邦では明治以降の華族制度に於いて初めて創設された最下位の爵位で、旧公家や武家では分家などによって維新後に華族に列せられた者（武家華族に列される基準としては一万石以上の所領が基準とされたことから、旗本は最上位の高家を含めて、維新以降の国家勲功以外の理由では男爵に列される者はいなかった。対して維新の際の功績といった名目で大藩の家老職の内の有意な数が後掲される「国家に勲功ある者」として男爵を授けられている）、各地の神職及び僧職の中でも特に古い家柄の者の外、「新華族」と称した、国家に勲功ある政治家・官僚・軍人及びそれ以外の三井・住友・鴻池・岩崎家といった実業家にも男爵が与えられた（但し、政治家の新華族は華族令当初に遅れた場合でも男爵を飛ばして子爵などから叙爵されたケースも多い）。その他、旧南朝の功臣の子孫などがある。貴族院へは男爵中で互選した者が華族議員となった。『日本においては公爵、伯爵と並んで知名度の高い爵位であり、文学作品、漫画などにも多くの男爵が登場する。その多くは大礼服よりも伝統的なスーツや乗馬服をまとった紳士風の人物として描かれており、貴族というよりは上位の紳士の称号として認識されている感が強い』とある。」

「わたしのしたことを」

「やぶちゃん注：これは旧全集に「断片」XIIIとするもので、新全集のこの題名は底本では下部に「仮」とあり、編者による仮題である。ないのも不自由なので「」で括弧して示した。」

×

「わたしのしたことをするな、
わたしの言ふやうにしる。」
あらゆる懺悔はかう云ふものだ。

×

前世に天國の幼稚園へはひり

(石鹼シキガの勻ひとのする薔薇の花の

一ぱいになつた幼稚園だ。)

算術を習つて來た叔父さんたち。

君たちこそ現世の紳士だ。

「やぶちゃん注：『資料集2』を底本とする新全集に拠り、旧全集で漢字を正字に直した。また、以
上の下線部は底本では傍点「ヽ」である。新全集後記によると、芥川龍之介晩年の創作と推測され
る」とする。」

「夜だけは僕を」

「やぶちゃん注：これは旧全集に「断片」XIVとするもので、新全集のこの題名は底本では下部に「仮」とあり、編者による仮題である。ないのも不自由なので「」で括弧して示した。」

1

夜だけは僕を静かにする。

僕は夜はダイヤモンドを截り

僕のピンに嵌めようとしてゐる。

多角形に截つたダイヤモンドを。

それもつまり考へて見れば、

氣違ひの息子に生まれたからだらう。

2

僕自身にも欺されない僕を

誰が欺してくれるものか？

僕は薔薇を食ふ犬たちではない。

晝までも目の見える金鍍金の梟だ。きんめつき やぐら

3

僕はアラセイトウの花のやうに

僕自身を五つの花びらにしてゐる。

「やぶちゃん注：「資料集2」を底本とする新全集に拠り、旧全集で漢字を正字に直した。「梟」の「ぶくろ」というルビはママ。旧全集では「ぶくろふ」とあり、また、最後の行に十五字分中黒「・」(前行の「僕自身を五つの花びらにしてゐる」の文字相当分)が打たれている。新全集後記によると、芥川龍之介晩年の創作と推測される、とする。」

主人ぶり

新むろの疊すがしみ、わがをれば

ここだ、ほづ枝の花ぞさきける、

ここだ、しづ枝の花ぞさきける。

「やぶちゃん注：「ここだ」は上代に使用された語で、「幾許」と書き、程度や量が甚だしくひどい、多い様を言う。こんなにも、沢山の意。「ほづ枝」は「上つ枝」（「かみつえだ」とも読む）Ⅱ「梢」で、上方の枝、「しづ枝」は「下つ枝」で下方の枝の意。」

「となりのいもじ」「より酒をたまはる

この酒はいづこの酒ぞ。

みこころを難波の灘の

黒松の酒、

白鷹の酒。

「やぶちゃん注：「となりのいもじ」の「いもじ」とは「鑄物師」のこと。芥川龍之介の隣家であった鑄金工芸家で友人の香取秀眞（明治七（一八七四）年〜昭和二九（一九五四）年）を指す。「難波」の「ながた」という読みは不審。「難波瀉」を音数律に合わせて短縮し、音の面白さを狙ったものか。」

戀人ぶり

風にまひたるきぬ笠の

なにかは路に落ちぢぢらむ。

わが名はいかで惜しむべき。

惜しむは君が名のみとよ。

「やぶちゃん注」底本後記によると、普及版全集では「相聞 二」として所収されており、多少の差異があるとして、普及版全集本文を掲げている。以下にそれを引用する（筑摩書房全集類聚版の「詩」ではこれを採用している）。

相聞 一

風にまひたるすげ笠の

なにかは路に落ちざらん。

わが名はいかで惜しむべき。

惜しむは君が名のみとよ。

また、後者は「或阿呆の一生」の「三十七 越し人」にも使用されているが、やはり微妙な表記の差異が認められるので、「三十七 越し人」全文を私のテキストより引用する。

三十七 越し人

彼は彼と才力さいりきよくの上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人ひんど」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹こゝに凍こった、かゞやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだった。

風に舞ひたるすげ笠の

何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき

惜しむは君が名のみとよ。

なお、普及版では「相聞 一」は、次の「同上」（＝「戀人ぶり」）の詩、「相聞 三」として後掲する著名なあの「相聞」が配される。これらの「相聞」の相手「越し人」が松村みね子（片山広子）を指すことは周知の事実である。」

同上

あひ見ざりせばなかなか
空に忘れてすぎむとや。

野べのけむりもひとすぢに
命を守るはかなしとよ。

「やぶちゃん注」前の詩同様、底本後記によると、普及版全集では「相聞 一」として所収されており、多少の差異があるとして、普及版全集本文を掲げている。以下にそれを引用する（筑摩書房全集類聚版の「詩」ではこれを採用している。そこではこの「相聞」の後。最終行は「多少の差異」とは言い難い別稿と捉えるべきものであると私は思う。

相聞 一

あひ見ざりせばなかなか
そらに忘れてやまんとや。
野べのけむりも一すぢに
立ちての後はかなしとよ。

なお、普及版では「相聞 二」は、前の「戀人ぶり」の詩、「相聞 三」として後掲する著名なあこの「相聞」が配される。」

父ぶり

庭んべは
浅黄んざくらもさいたるを、
わが子よ、這ひ來。
遊ばなん。
おもちゃには何よけん。
風船、小鞆、笛よけん。

「やぶちゃん注…類聚版では副題として「——室生犀星に——」とある。編者注によると、これは催馬楽の形式を模しているとする。その注でも指摘されているが、「遊ばなん」の「なむ」は未然形接続であるため、あつらえ望む終助詞で「遊んで欲しい」の意となり、ややおかしい。強意の助動詞「ぬ」の未然形十意志の助動詞「む」の「遊びなん」の誤りかと思われる。」

百事新たならざるべからざるに似たり

な古りそねや。

さ公きんだちや。

新水干にひすあかん にひぎょうりに新草履、

新さび烏帽子にひちやくと着なば、

新はり道にひにやとかがみ、

新糞にひぐせまれや。

さ公きんだちや。

「やぶちゃん注…以上、冒頭の「まぶり」からこの詩までは、大正二四（一九三五）年四月一日発行の雑誌『文藝日本』に掲載された「澄江堂雜詠」に所収する。底本の本文では「澄江堂雜詠」表題下に『（＝）文藝日本』大正十四年一月』とあるが、この月の齟齬についての説明はない。」

棕櫚の葉に

風に吹かれてゐる棕櫚の葉よ
お前は全体もふるへながら、
縦に裂けた葉も一ひらづつ
絶えず細かにふるへてゐる。
棕櫚の葉よ。俺の神経よ。

「やぶちゃん注：大正一五（一九二六）年七月刊の雑誌『詩歌時代』所収。」

風琴

風きほふ夕べをちかみ、

戸のかげに身をひそめつつ、

(いかばかりわれは羞ぢけむ。)

オルガン
風琴をとどろとひける

め
女わらべの君こそ見しか。

とし月の流るるままに

を
男わらべのわれをも名をも

いまははた知りたまはずや。

いまもなほ知りたまへりや。

「やぶちゃん注・昭和二（一九二七）年八月刊の雑誌『手帖』所収。旧全集の佐藤春夫宛大正二四（一九二五）年九月二十五日附の一三七七書簡にこの詩の初形と思われるものがあるので、以下に引用する。

風きほふゆふべなりけむ、

窓のとのびあがりつつ

オルガンをとどろとひける

女わらべの君こそ見しか。

男わらべのわれをも名をも

年月の流るるままに

いまははた知りたまはずや。

いまもなほ知りたまへりや。

「こちらは無題である。」

山吹

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはころやすらはん。
垣ほを見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

「やぶちゃん注…この最後の句は芭蕉のもの。」

山吹や笠に挿すべき枝の形

元禄四（一六九二）年、江戸赤坂の庵にて。芭蕉四十七歳の作。

底本後記によると、元版全集には文末に「（大正十一年五月）」とあるとする。とすれば、芥川龍之介は満三十歳である。

この詩は自死後の、昭和二（一九二七）年八月発行の『文藝春秋』に掲載された「[東北・北海道・新潟](#)」に（リンク先は私のテキスト）、

羽越線の汽車中——「改造社の宣傳班と別る。……」

あはれ、あはれ、旅びとは

いつかはころやすらはん。

垣ほを見れば「山吹や

笠にさすべき枝のなり。」

の形で載る。」

相聞

また立ちかへる水無月の
歎きを誰にかたるべき。

沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

「やぶちゃん注：旧全集の修善寺からの室生犀星宛大正一四（一九二五）年四月十七日附の一三〇六書簡に『又詩の如きものを二三篇作り候間お目にかけて候。よければ遠慮なくおほめ下され度候。原稿はそちらに置いて頂きいづれ歸京の上頂戴する事といたし度。』とし（この原稿とは以下の詩稿を指すと判断する）、次の一篇を記す。

歎きはよしやつきずとも

君につたへむすべもがな。

越こしのやまかぜふき晴るる

あまつそらには雲もなし。

また立ちかへる水無月の

歎きをたれにかたるべき

沙羅のみづ枝に花さけば、

かなしき人の目ぞ見ゆる。

詩の後に『但し誰にも見せぬように願上候（きまり悪ければ）尤も君の奥さんにはちよつと見てもらひたい氣もあり。感心しさうだつたら御見せ下され度候。』微妙な自負を記す。更に、龍之介

の大正一四（一九二五）六月一日発行の雑誌『新潮』に掲載された「[澄江堂雜詠](#)」の「[六 沙羅の](#)

[花](#)」（[私の抽出電子テキスト版を参照されたい](#)）にも現われる。」

冬

まばゆしや君をし見れば
薄ら氷に朝日かがよふ

えふれじや君としをれば
臘梅の花ぞふるへる

冬こそほこにありけめ

「やぶちゃん注：小穴隆一の二二つの絵」等によれば、これは平松麻素子へ献じられた詩とされる。」

手袋

あなたはけふは鼠いろの
羊の皮の手袋をしてゐますね、
いつもほつそりとしなつた手に。
わたしはあなたの手袋の上に
針のやうに尖つた峯を見ました。
その峯は何かわたしの額ひたひに
きらきらする雪ゆきを感じさせるのです。
どうか手袋をとらずに下さい。
わたしはここに腰かけたまま
ぢつとひとり感じてゐたいのです、
まつ直に天を指してゐる雪ゆきを。

「やぶちゃん注：小穴隆一の「二つの絵」等によれば、これは平松麻素子へ献じられた詩とされる。」

荅

さびしとも人こそ言はぬ。

わが戀ふはいまだ見ねども

秋しぐれすぎゆくなぐに

清らなる

はまゆふ
濱木綿の花、……

鏡

丈たけなせる鏡のまへに

ひもすがらひとりしをれば

かきつばたにほへるひとは

まみえじとつげこそ來こしか。

すべなしと知りは知れども

おもかげをしばしうつせる

鏡にぞ言ふべかりける。――

ひもすがらひとりしをれば

わがともはわれのみぞとよ。

「やぶちゃん注：「かきつばた」は杜若のように美しく咲くの意から「にうつらふ」（美しい）に懸かる枕詞であるが、「こころは同義語の」「にほへる」の枕詞として機能している。」

臘梅

臘梅の匂を知つてゐますか？

あの冷やかにしみ透る匂を。

わたしは——実に妙ですね、——

あの臘梅の匂さへかげば

あなたの黒子を思ひ出すのです。

「やぶちゃん注：小穴隆一の「二つの絵」等によれば、これは平松麻素子へ献じられた詩とされる。底本後記によると、先の「冬」からこの詩までは、元版全集には文末にすべて「昭和二年」とあるとする。」

修辭學

ひたぶるに耳傾けよ。

空みつ大和言葉に

こもらへる筈くじの音とである。

「やぶちゃん注・底本後記によると、元版全集には「大正十五年十一月」とあるとする。「空みつ」は「大和」の枕詞。」

酒ほがひ

なさめそねや。

さ公だちや。

市に立ちたる磔はたものに、

鴉はさはにむるるとも

豊とよの大御酒おほみきつきぬまは、

筆ふで築きふけや。

さ公きんだちや。

「やぶちやん注…底本後記によると、元版全集には「(大正十四年一月)」とあるとする。「ほがひ」とは「寿ほが」の名詞形で、祝う、ことほぐこと。「なさめそねや」は、酒の酔いから醒めてはならぬ、の意。類聚版編者注によると、「さ公だちや」等は催馬楽の囃言葉とする(但し、催馬楽では「公達」は原義を失っているが、ここでは原義を生かしている、とする)。」

洞庭舟中

しらべかなしき蛇皮線に、

セウスキホア

小翠花は歌ひけり。

耳輪は金にゆらげども、

君に似ざるを如何せむ。

「やぶちゃん注」これは底本の「詩歌一」にある。そこでは大正十二年九月の『明星』に掲載されたものとする。これは芥川の中国行の一篇であり、筑摩書房全集類従版の「詩」の中での同じ位置、次の中国旅行の同時期の作「劉園」の前に置くこととする。但し、この初出とする旧全集の與謝野寛・同晶子宛旧全集版九〇四書簡と全集類従版の表記を比べると異同があるため、同書簡を底本とした。なお、同書簡には大正十年五月の長春からの絵葉書で、詩の後に「これは新體今様であります長江洞庭の中はこんなものをつくらしめる程退屈だと思ひ下さい 以上」とあり、「五月三十日 湖南長沙 我鬼」と記す。「小翠花」は別名于連泉、龍之介の「上海游記」の「九 戲台(上)」「十 戲臺(下)」にも記される京劇の花旦「Huadan」(可愛い若い女性役の男優)の名優である。]

劉園

人なき院にただひとり

古りたる岩を見て立てば、

花木犀は見えねども

冷たき香こそ身にはしめ。



「やぶちゃん注…明の嘉靖年間に徐時泰が建てた中国四大名園の一つ。私も行ったが「漏窓」と言われる透かし窓や奇岩奇石の迷宮のような作りに素敵に異界を覚えた。」

不眠症

眞夜中の廊下の隅に

笠の青い電燈のスタンドが一本

ひっそりと硝子戸に映つてゐる。

いつも頭の中を見つめる度に。

「やぶちゃん注…底本後記によると、元版全集には「昭和二年」とあるとする。」

Melancholia

この田舎路はどこへ行くのか？

唯憂鬱な畑の土に細い葱ばかり生えてゐる。

わたしは當どもなしに歩いて行く、

唯憂鬱な頭の中に剃刀の光りばかり感じながら

「やぶちゃん注：底本後記によると、元版全集には「大正十二年十二月」とあるとする。」

心境



廃れし路をさまよへば
光は草に消え行けり
けものめきたる欲念に
怯ぢしは何時の夢ならむ

時雨

西の田の面もにふる時雨
東に澄める町の空
二つ心のすべなさは
人間のみと思ひきや

「やぶちゃん注：旧全集の大正二〇（一九二二）年九月二十日附佐々木茂索宛九四〇書簡にこの詩を記し（差異は「東に澄める町のそら」の「空」のみ）、その後『これは三十男が斷腸の思を托せるものなり 一唱二嘆せられたし』と書いている。」

沙羅の花

沙羅のみづ枝に花さけば
うつつにあらぬ薄明かり
消なば消ぬべきな空に
かなしきひとの眼ぞ見ゆる





船乗りのざれ歌

この身は鱻の餌ともなれ
汝を賭け物に博打たむ
びるぜん・まりあも見そなはせ
汝に夫あるはたへがたし

「やぶちゃん注：「びるぜん・まりあ」はポルトガル語の「*virgin maria*」で聖処女マリア。」

船中

ゆふべとなれば海原も
遠島山も煙るなり
今は忘れぬおもかげも
老いては夢にまがふらん

雪

初夜の鐘の音聞ゆれば
雪は幽かにつもるなり
初夜の鐘の音消え行けば
汝はいまひと眠るらむ

夏

微風は散らせ袖の花を
金魚は泳げ水の上を
汝は弄べ晝團扇を
虎疫ころりは殺せ汝が夫つまを

悪念

松葉牡丹をむしりつつ
ひと殺さむと思ひけり
光まばゆき昼なれど
女ゆゑにはすべもなや

暁

「ひとの音せぬ暁に
ほのかに夢に見え給ふ」
佛のみかは君もまた
「うつつならぬぞあはれなる」

「やぶちゃん注…これは「梁塵秘抄」巻二の法ほうもん文もん歌うたに基づく。以下に引用する（底本は新潮日本
古典集成版を用いた）。

ほどけは常にいませども
うつつならぬぞあはれなる

人のおとせぬあかつきに

ほのかに夢にみえたまふ

やぶちゃんの現代語訳…

み仏というものは常に我らがそばにいますと存じながら、

愚かなる私の眼には拝み得ぬことの、何としても哀しく侘しく、

故に、恋しく慕わしいもの……

人声も物音も絶え果てたその暁の頃、

幽かに私の夢の内にその影をお現わしになられた……

ここにあるのは言うまでもなく信仰の極限の仏身への恋着という特異点である。そして、そこにやはり「煩惱即菩提」を、我執とも言える恋着に悩む龍之介は見てとったに違いない、と私は思うのである。」

佛

涅槃のおん眼ほのぼのと

とざさせ給ふ夜半にも

かなしきものは釋迦如來

邪淫の戒を説き給ふ

戯れに(二)

汝と住むべくは下町の

水どろは青き溝つたひ

汝が洗場行き來には

晝もなきじる蚊を聞かん



戯にれに(2)

汝と住むべくは下町の

晝は寂しき露路の奥

古簾垂れたる窓の上に

鉢の雁皮も花さかむ

「やぶちゃん注：底本後記によると、「心境」から、この詩までは元版全集の「月報」第八号の「編輯者のノオト」に『「心境」以下の今様風の詩は全部、一つの帳面に清書されてあったものである。それらは大正十年頃のやうに思はれる。』とある、とする。「雁皮」はジンチョウゲ科ガンピ *Diplomorpha sikokiana*。古く奈良時代から紙の原材料とされてきた。初夏に枝の端に黄色の小花を頭状花序に七から二十、密生させる。[グーグル画像検索「雁皮の花」](#)。】



ひとりあるものうたへる

I

ちまたにさせる春の月
をぐらきみづのへをゆけば
かなしきものぞひとりなる
すがれし花のほひより

II

雨あがりなる青いばら
ひとり徑みちゆく朝かげの
こころは汝なれに似るものか
いばらに懸るかたつむり

III

おち葉をしける徑みちの奥
いのちの秋をかこちつつ
ひとり見しこそ忘れぬ
晴らくもるひるの月

IV

雪にたわめるひともとの
竹のこころとなりけり
ひとり世にある寂しさは
雪よりただに身にぞしむ

新今様

人を佛とあがむれば

豆の畑に茨生ひ

粟の畑に薊生ひ

赤子は背むしと生るべし

凡夫のめづるみ佛は

圓光まどかにかけて給ふ

おきなのみづるみ佛は

柏の餅をくひ給ふ

「やぶちゃん注…底本後記によると、昭和四（一九二九）年七月一日発行の雑誌『相聞』に掲載され、同誌の「後記」に『この號の卷頭に載せた芥川龍之介君の遺稿「新今様」は、長崎の渡邊庫輔君が秘藏してゐたもの』とある。』とする。」

愛の詩集

室生君。

僕は今君の詩集を開いて、

あの頁の中に浮び上った

薄暮の市街を眺めてゐる。

どんな惱ましい風景が其處にあつたか、

僕はその市街の空氣が

實際僕の額の上にこびりつくやうな心もちがした。

しかしふと眼をあげると、

市街は、——家々は、川は、人間は、——

みな薄暗く煙つてゐるが、

空には一すぢぼんやりと物凄い虹が立つてゐる。

僕は悲しいのだから嬉しいのだから自分にもよくわからなかつた。

室生君。

孤獨な君の魂はあの不思議な虹の上にある！

「やぶちゃん注」『愛の詩集』は室生犀星の処女詩集で大正七（一九一八）年一月に刊行された。その「定本 愛の詩集」が昭和三（一九二八）年一月に聚英閣から出版された際、その巻頭に（扉には「愛の詩集に」という献辞あり）掲げられた詩である。同詩集の「序」で犀星は『芥川君の詩を巻頭に掲げたのは同君が大正九年に自分に初めて書いた詩だと云ひ、自分に手交して見せたもので誠に同君の最初の詩作であるらあしかつた。』と記す（底本後記による）。旧全集の大正八（一九一九）年十月三日附室生犀星宛五八七書簡に、

啓 高著難有く拝見あの詩集は大へん結構な出来だと思ひます私が今まで拝見した詩集の中でも一番私を動かししました昨夜は一晩あれを耽讀しました私の詩を贈ります私が一生に一つの詩になるかも知れない詩です下手でも笑つちやいけません「愛の詩集」はもつと度々讀んで見る心算です御禮まで 頓首

我 鬼

十月三日

室生犀星様

として、その後はこの詩を記している(異同なし)。「

散文詩——Oscar Wilde——

師

今や闇路の上に来れり。

その時アリマシヤのジョセフは松の木の松明を燃やし丘より下りて谷に入りぬ。
そは彼が家になすべき事ありし故なり。

「亡滅の谷」なる燧石のちりほへるに脆きて、彼は人の若者の裸にて泣けるを見たり。
其の髪は蜜の色をなし、

そが体は白き花の如くなりき。

されど彼荊もて體を傷け、

髪をも亦王冠の如く灰にまみらせたり。

家豊かなるアリマシヤは裸にて泣ける若者に云ふやう、

「我爾が悲しみの大なるを怪しまず、そは眞に『彼』は義しき人なりし故なり。」

若者答へけるは「我が嘆くは『彼』が爲ならず。我自らの爲なり。」

われ亦水を化して葡萄酒となし、

われ亦癩を病む者の悩みを癒し、

われ亦盲し者の眼を開かしめ、

われ亦水の上を歩み、

われ亦塚大の中に住む者より惡鬼を逐ひ、

われ亦食なき砂漠に饑ゑたる者を飽かしめ、

われ亦死せる者をそが狭き家より立たしめ、

われ亦人みな群れたる前に實なき無花果の木を呪ひして凋ましめつ、

されど人々のわれを十字架にかけんとせざるはいかに。」

弟子

ナアシツサスのみまかりし時、

そが快樂けらくの泉は甘き水の杯さかづきより化して鹹しほき涙の杯となりぬ。

されば木精こだまら森しげきあたりを嘆なげきもとほりぬ。

彼が潦せうの甘き水の杯より鹹しほき涙のさかづきに化せしを見て、

そが髪のみどりなる花たばをみだし、

泣く泣く云ひけるは

「うべ、爾いましがかくナアシツサスをいたむこと彼いましこそ美しかりしか。」

「されどナアシツサスは美しかりしや。」と潦せう云ふ。

木精ら答こたへふらく

「爾いましにまして誰かよくそをわきまへん。

彼屢々しばしばわれらが傍そばをよぎりつ、

されど爾いましがもとへは、

彼いましいましをもとめて來るなり。

彼爾いましのきしに伏し、

爾いましを見下ろし、

爾いましの水の鏡に己おのれが美しさをうつし見つ。」

潦せうの答へけるは

「さればわれナアシツサスを愛せしは、

彼がわがきしに伏し、

われを見下ろす時、

われ彼が眼の鏡にうつれる、

われみづからの美しきを見たればぞ、」とよ。

「やぶちゃん注：底本では「彼屢々われらが傍をよぎりつ」「の『廻』の繰り返し記号は漢文に用いられる「〃」の字型の右下ポイント落ちである。底本後記によると、元版・普及版全集には文末に

「(大正九年十一月)」とあるとする。

この二篇は、オスカー・ワイルドが一八六四年に発表した六編から成る、「散文詩」(原題：Poems in Prose)の中の二篇を芥川龍之介が抽出して訳したものである。以下に原文を掲げる(引用は英

文サイト「Literature Network」の「[Poems in Prose](#)」のゆのぎ、他の信頼し得るサイトのゆのぎを参照し、この「整字」と引用した。

THE MASTER

Now when the darkness came over the earth Joseph of Arimathea, having lighted a torch of pinewood, passed down from the hill into the valley. For he had business in his own home.

And kneeling on the flint stones of the Valley of Desolation he saw a young man who was naked and weeping. His hair was the colour of honey, and his body was as a white flower, but he had wounded his body with thorns and on his hair had he set ashes as a crown.

And he who had great possessions said to the young man who was naked and weeping, 'I do not wonder that your sorrow is so great, for surely He was a just man.'

And the young man answered, 'It is not for Him that I am weeping, but for myself. I too have changed water into wine, and I have healed the leper and given sight to the blind. I have walked upon the waters, and from the dwellers in the tombs I have cast out devils. I have fed the hungry in the desert where there was no food, and I have raised the dead from their narrow houses, and at my bidding, and before a great multitude, of people, a barren fig-tree withered away. All things that this man has done I have done also. And yet they have not crucified me.'

*

THE DISCIPLE

When Narcissus died the pool of his pleasure changed from a cup of sweet waters into a cup of salt tears, and the Oreads came weeping through the woodland that they might sing to the pool and give it comfort.

And when they saw that the pool had changed from a cup of sweet waters into a cup of salt tears, they loosened the green tresses of their hair and cried to the pool and said, 'We do not wonder that you should mourn in this manner for Narcissus, so beautiful was he.'

'But was Narcissus beautiful?' said the pool.

'Who should know that better than you?' answered the Oreads. 'Us did he ever pass by, but you he sought for, and would lie on your banks and look down at you, and in the mirror of your waters he would mirror his own beauty.'

And the pool answered, 'But I loved Narcissus because, as he lay on my banks and looked down at me, in the mirror of his eyes I saw ever my own beauty mirrored.'

但し、本詩篇はワイルズが「The Artist」・「The Doer of Good」・「The Disciple」・「The Master」・「The House of Judgment」・「The Teacher of Wisdom」の順に編成した散文詩であつて、芥川龍之介の二篇連奏の、このあたかも唱和的（この謂いが不穏当であるならば少なくとも「師」に対比された「弟子」としての対称的）な訳の示し方は順序を逆にしており、はなはだ恣意的ではある。

「アリマシヤのジョセフ」（Joseph of Arimathea）アリマタヤのヨセフ。新約聖書で弟子たちも逃げ去つた中でイエスの遺体を引き取つて埋葬したユダヤ人の義人。聖人の一人。

「彼が家」類聚版脚注ではこの「彼」を「イエス・キリスト」とする。ここよりも後の「彼」がイエス・キリストであることは分かるが、ここもそうだろうか？ 原詩の意味が半可通の私にはよく分からない。識者の御教授を乞う。

「弟子」の「ナアシツサス」は言わずもがな、ナルキッソス（Narcissus）。

同じく「弟子」の詩句中の「潦」は「にはたづみ」（にわたづみ）と読み、雨が降つて地上に溜まり、またそこ流れる水を言う。ここは泉の意と解してよい。音数律から選んだものであるう。」

おれの詩

おれの頭の中にはいつも薄明い水たまりがある。

水たまりは滅多に動いたことはない。

おれはいく日もいく日も薄明い水光りを眺めてゐる。

と、突然空中からまつさかさまに飛びこんで来る、目玉ばかり大きい青蛙！

おれの詩はお前だ。

おれの詩はお前だ。

「やぶちゃん注…底本後記によると、普及版全集には「(大正十二年十一月)」とあるとする。」

ロツプス（クロオド・バアル）

われは昨夜「死」を見たり

街燈に氷雨降る

路狭く、人も無し。

唯一人わが前に

忘れんや、黒き裾

帽子には枯れし薔薇、

弱腰もたをたと

歩むなり、賣笑婦。

追ひすがり、呼べば、あゝ

街燈の光のもなか、

神の子よ、救はせ給へ。

見返りし髑髏の面。

冷かに嘲笑ひつつ

云ひにしか、 Bon Soir.

われは昨夜「死」を見たり。

「やぶちゃん注」…翻訳？

「ロツプス」は（Félicien Rops 一八三三年～一八九八年）フェリシアン・ロツプス。ベルギーの画家であるが、パリをその本拠地とした。世紀末にあつて多くの同時代の「呪われた作家達」ボードレールやマラルメの挿絵を描いて、悪魔主義を背負いながら、自身の個性的な世界を切り開いた。[画像検索「Félicien Rops」](#)。芥川龍之介関連では小説「路上」の最終章三十六章で主人公俊助が受け取った同人誌の目次の中に「獨逸文科學生」の同人である近藤が書いた「ロツプス論」と出るのと、遺稿類の手帳の「12」（新全集新発見分）の中に「○Félicien Rops : Verlag von Marquardt & Co. Belin」という書誌情報らしきメモがあるのみである。如何にも龍之介好みの画家ではあるように思われる。

「クロオド・バアル」はこの詩の原詩の作者で、ロツプスの絵に靈感を感じた詩人かとも思われ

るのではあるが、筑摩書房全集類聚版同様、かなりのワードの組み合わせで試みてみたが、私も遂に現在、知り得ない作家である。識者のご教授を乞う。フランス人と仮定すると綴りは「Claude Barr」か？」]

僕の瑞威スウィットルから

信條

娑婆苦最小にしたいものは

アナキストの爆弾を投げろ。

娑婆苦を娑婆苦だけにしたいものは

コミュニニストの棍棒をふりまはせ。

娑婆苦をすつかり失ひたいものは

ピストルで頭を撃ち抜いてしまへ。

レニン第一

君は僕等東洋人の一人だ。

君は僕等日本人の一人だ。

君は源の頼朝の息子だ。

君は——君は僕の中にもゐるのだ。

レニン第二

君は恐らくは知らずにゐるだらう、
君がミイラになつたことを？

しかし君は知つてゐるだらう、
誰も超人は君のやうにミイラにならなければならぬことを？

(僕等の仲間の天才さへエジプトの王の屍骸のやうに美しいミイラに變つてゐる。)

君は恐らくあきらめたであらう、

兎に角あらゆるミイラの中でも正直なミイラになつたことを？

註 レニンの死体はミイラとなれり。

レニン第二

誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を輕蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は
誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の勻のする電氣機關車だ。

「やぶちゃん注」…この「レニン第三」は「[或阿呆の一生](#)」の「三十三 英雄」にも以下のように使用されている。

三十三 英雄

彼はヴォルテエルの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。氷河の懸つた山の上には秃鷹の影さへ見えなかつた。が、背の低い露西亞人ロシアじんが一人、執拗に山道を登り上げてゐた。

ヴォルテエルの家も夜になつた後、彼は明るいランプの下にかう云ふ傾向詩を書いたりした。あの山道を登つて行つた露西亞人の姿を思ひ出しながら。……

——誰たれよりも十戒を守つた君は

誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は

誰よりも民衆を輕蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は

誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ

草花の匂のする電気機關車だ。——

この詩部分は引用を示すダッシュと「匂」の字体相違を除けば（芥川龍之介は私の感触では「匂」という字体を好んだように思われる）、異同はない。」

カイゼル第一

君は碌に散歩も出来ない。

君は樂々と立ち小便も出来ない。

君は一行の詩も残せない。

君は罷業も怠業も出来ない。

君は勝手に自殺も出来ない。

君は、——あらゆるカイゼルは最も割りに合はない職業に就いてゐる！

カイゼル第二

君を褒める言葉はこればかりだ——

君が賣る勲章は割に安い！

「やぶちゃん注：この「カイゼル」はドイツ語の「ドイツ皇帝」、一般には初代ドイツ皇帝ウイルヘルム二世を指すことが多い。「Kaiser」であるが、ここで芥川龍之介は皇帝・天皇の一般名詞として確信犯で使用している。」

手

諸君は唯望んでゐる、

諸君の存在に都合の善い社会を。

この問題を解決するものは

諸君の力の外にある筈はない。

ブルジョアは白い手に

プロレタリアは赤い手に

どちらも棍棒を握り給へ。

ではお前はどちらにする？

僕か？ 僕は赤い手をしてゐる。

しかし僕はその外にも一本の手を見つけてゐる、

——あの遠國に餓死したドストエフスキイの子供の手を。

註 ドストエフスキイの遺族は餓死せり。

生存競争

優勝劣敗の原則に従ひ、

狐は鶏を齧み殺した。

さて、どちらが優者だつたかしら！

立ち見

薄暗い興奮に満ちた三階の上から
無数の目が舞台へ注がれてゐる、
ずつと下にある、金色の金色へ。

金色の舞台は封建時代を
長方形の窓に覗かせてゐる、
或は一度も存在しなかつた時代を。

薄暗い興奮に満ちた三階の上から
彼の目も亦舞臺に注がれてゐる、
一日の労働に疲れきつた十七歳の人夫の目さへ。

ああ、わが若いプロレタリアの一人も
やはり歌舞伎座の立ち見をしてゐる！

「やぶちゃん注：昭和三（一九二八）年二月一日発行の雑誌『驢馬』に「僕の瑞威から（遺稿）」として掲載された。

因みに、「瑞威」は永世中立国スイス（公式の英語表記 Swiss Confederation 及び Switzerland）であるが、ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語の四種を公用語を有するスイスでは単独公式表記として、世界的に珍しいラテン語による *Confederatio Helvetica* という国名表記がある。龍之介のこの詩の思いを、私は汲んで、それを記すこととする。

そうして——最後に「立ち見をしてゐる！」のは！——芥川龍之介よ！——誰あろう！ 君の息子の多加志だとは、思つても見なかつただらう？」——」

未定詩稿

「やぶちゃん注：これは、昭和六（一九三二）年九月発行の雑誌『古東多方』から翌七年一月発行の号まで、四回に亘って「佐藤春夫編・澄江堂遺珠」として掲載され、後、昭和八（一九三三）年三月岩波書店から芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯「澄江堂遺珠 *Sois belle,sois triste.*」に収められた。その後、昭和一〇（一九三五）年七月発行の「芥川龍之介全集」（それを普及版全集と称する）第九巻に「未定詩稿」の題で所収された。底本は岩波版旧全集（旧普及版全集本文底本）（★「澄江堂遺珠 *Sois belle,sois triste.*」そのままだけではない点に注意★）に拠った。ここでの改頁の不統一は連続性を誤読することのないように細心の注意を以って扱った結果であるので、特に有意な行空けがあることを意味してはいいないので留意されたい。「」は編者によるものと思われる。

【二〇一四年十二月十五日追記】なお、私は二〇一五年一月一日以降の佐藤春夫の著作権満了を待つて、近日中に「澄江堂遺珠 *Sois belle,sois triste.*」及び、現行通用しているこの旧全集版「未定詩稿」、そして新全集版の『「澄江堂遺珠」関連資料』の三種を総て合わせた電子テキストを公開する予定である。】

夜はの川べに来てみれば
水をもをこむる霧の中
花火は室に消えゆけり
われらが戀もかくやらむ

*

人を殺せどあきたらぬ
妬み心も今ぞ知る
赤き光にとぶ蠅も
日頃は打つにうきものを

*

ひるの曇りにしんしんと
石菖の葉はむらだてり
ひるの曇りにしんしんと
痛む心は堪へがたし

*

山べを行けば岩が根に
何時しか苔も青みけり
日かげに煙る清水にも
何かは人のなつかしき

*

かなしきものはほの暗き

月の中なる山の影

君が心のおとろへも

見じとはすれど見ゆるなる

*

雨にぬれたる曼珠沙華

ふみつつひとり思ひけり

天女にあらぬ人の上

——釋迦佛の世は遙なり

*

ひとを戀ひつつただひとり

踏むは濡れたる敷石に

誰がまきすてし曼珠沙華

——釈迦佛の世は遙なり

*

澄むことしらぬ濁り江に

かがやかなりや支那金魚

わが煩惱のもなかにも

さこそはすぐる彌陀（ごころ）

*

ひとをまつまのさびしさは
時雨かけたるアーク燈
まだくれはてぬ町ぞらに
こころはふるふ光かな

*

のみ忘れたるチヨコレエト
つめたき色に澄むときは
幽かにつもる雪の音も
君が吐息にまじるなり

*

まひるの月を仰ぎつつ
萩原をあゆむやさ男
あれは阿呆かもの狂ひ
いやいや深草の少將に候

*

遠田の蛙聲やめば
いくたびよはの汽車路に
命すてむと思ひけむ
わが夫はわれにうかりけり

*

心ふたつにまよひつゝ
たどきも知らずわが來れば
まだ晴れやらぬ町ぞらに
怪しき虹ぞそびえたる

*

光はうすき橋がかり
静はゆうに出でにけり
昔めきたるふりながら
君に似たるを如何にせむ

*

女ごころは夕明り
くるひやすきをなせめそ
きみをも罪に墮すべき
心強さはなきものを

*

紅蓮と見れば炎なり
炎と見れば紅蓮なり
安養淨土は何處やらむ
救はせ給へ技藝天

[*Sois belle,sois triste*]

*

何かはふとも口「もりし

えやは忘れむ入日空

せんすべなげに仰ぎつつ

何かはふとも口「もりし

その

入日の空を仰ぎつつ

何かはふとも口「もりし

消えし言葉は如何なりし

*

「思ふはとほきひとの上」

波に音なきたそがれは

「思ふはとほき人の上」

船のサロンにただひとり

安睡の茶を啜りつつ

ふとつふやきし寂しさは

「やぶちゃん注：「安睡」音は「まいくわい(まいかい)」「訓じて「はまなす」と読むが、孰れとも考え得る。歌柄が芥川の中国行の際のイメージを思わせ、その場合は寧ろ、音「マイクワイ(マイカイ)」の可能性が高いと思うからである。中国原産のバラ亜綱バラ目バラ科バラ属ハマナス *Rosa rugosa* は、あちこでは普通に花を乾燥させて茶や酒の香料とする。」

*

水の上なる夕明り
畫舫にひとをおもほへば
たがすて行きし薔薇の花
白きばかりぞうつつなる

*

畫舫はゆるる水明り
ほるけき人をおもほへば
わがかかぶれるヘルメツト
白きばかりぞうつつなる

〔欄外二〕 *Sois belle, sois triste* トニフ

はるけき人を思ひつつ
わが急がする驢馬の上
穂麥がくれに朝焼けし
ひがしの空ぞ忘れね

*

みどりはくらき檜の葉に
ひるの光のしづむとき
つととびたてる大鴉

みどりは暗き檜の葉に
晝の光の沈むとき
ひとを殺せどなほあかぬ
妬み心も覺えしか

緑はくらき檜の葉に
晝の光の沈むとき
わが欲念はひとすぢに
をんなを得むと

みどりはくらき檜の葉に
晝の光のしづむとき
きみが心のおとろへぞ
ふとわが

*

ひとをころせどなほあかぬ
ねたみごころもいまぞ知る
垣にからめる薔薇の實も
いくつむしりてすてにけむ
垣にからめる薔薇の實も
いくつむしりて捨てにけむ
ひとを殺せどなほあかぬ
ねたみ心に堪ふる日は

*

ひとり葉巻をすひ居れば
雪は幽かにつもるなり
かなしきひともかかる夜は
かそかにひとりいねよかし

幽かに雪のつもる夜は
ひとり胡桃を塗きあたり
こよひは君も冷やかに
ひとりいねよと祈りつつ

ひとり胡桃を塗き居れば
雪は幽かにつもるなり
ともに胡桃は塗かずとも
ひとりあるべき人ならば

*

ひとり山路を越え行けば
雪は幽かにつもるなり
ともに山路は越えずとも
ひとり眠まどへき君ならば

*

ひとり山路を越え行けば
月は幽かに照らすなり
ともに山路は越えずとも
ひとり眠ぬべき君ならば

*

夜毎にきみと眠るべき
男あらずばなぐさまむ

*

雲は幽かにきえゆけり
みれん

夕づく牧の水明り
花もつ草はゆらぎつつ
幽かに雲も消ゆるこそ
みれんの

水は明るき牧のへも
花もつ草のさゆらぎも
わすれがたきをいかにせむ
みれんは

みれんは牧の水明り
花もつ草の

*

いづことわかぬ霧の中
かそけき月によわよわと
啼きづる山羊の聲聞けば
遠き人こそ忘れね

何か寂しきはつ秋の
日かげうつろふ霧の中
茨ゆ立ちし鵲か
ふと思はるる人の顔

*

雨はけむれる午さがり
實梅の落つる音きけば
ひとを忘れむすべをなみ
老を待たむと思ひしが

谷に沈める雲見れば
ひとを忘れむすべもなみ
老を待たむと思ひしが

ひとを忘れむすべもがな
ある日は古き書のなか
勻も消ゆる白薔薇の
老を待たむと思ひしが

*

雨にぬれたる草紅葉

侘しき野路をわが行けば

片山かげにただふたり

住まむ薫家ぞ眼に見ゆる

*

われら老いなばもろともに

穂麥もさわに刈り干さむ

夢むはとほき野のほてに

穂麥刈り干す老ふたり

明るき雨のすぎ行かば

虹もまうへにかかれとぞ

夢むは遠き野のはてに

穂麥刈り干す老ふたり

仄けき雨の過ぎ行かば

虹もまうへにかかるらむ

たとへばとほき野のはてに

穂麥刈り干すわれらなり

われらは今日も野のはてに

穂麥刈るなる老ふたり

雨に濡るるはすべもなし

幽かにかかる虹もがな

*

ゆふべとなれば

物の象はまぎれ

かたち

物の象のしづむごと

老さりくれば

牧の小川も草花も

夕となれば煙るなり

われらが戀も

牧の小川も草花も

夕となれば煙るなり

わが悲しみも

老いさりくれば消ゆるらむ

ゆふべとなれば草むらも

ゆふべとなれば海ばらも

.....

今は忘れぬおもかげも

老さりくれば消ゆるらむ

ゆふべとなれば波の穂も

遠島山も煙るなり

今は忘れぬおもかげも

老いさりくれば消ゆるらむ

夕となれば家々も
畑なか路も煙るなり
今は忘れぬおもかげも
老さり來れば消ゆるらむ

【やぶちゃん注：底本では最後に編者による『(大正十年)』のクレジットがある。

「*Sois belle,sois triste.*」はフランス語で「より美しかれ、より悲しかれ。」で、これはボードン
ーヌ (Charles Baudelaire) が一八六一年五月に発表した「悲しいマドリガル(恋歌)」(*Madrigal
triste*) ——現在は「悪の華」(*Fleurs du mal*) の続編・補遺に含まれる一篇——の一節である。
以下に原詩総てを示しておく(英文サイト「Charles Baudelaire's *Fleurs du mal* / *Flowers of
Evil*」の[こちら](#)より引用。リンク先原文下に英訳有り。翻訳例は注の最後にリンクした)。

Madrigal triste

I

Que m'importe que tu sois sage?
Sois belle! Et sois triste! Les pleurs
Ajoutent un charme au visage,
Comme le fleuve au paysage;
L'orage rajeunit les fleurs.
Je t'aime surtout quand la joie
S'enfuit de ton front terrassé;
Quand ton coeur dans l'horreur se noie;
Quand sur ton présent se déploie
Le nuage affreux du passé.
Je t'aime quand ton grand oeil verse
Une eau chaude comme le sang;
Quand, malgré ma main qui te berce,
Ton angoisse, trop lourde, perce

Comme un râle dagonisant.

J'aspire, volupté divine!

Hymne profond, délicieux!

Tous les sanglots de ta poitrine,

Et crois que ton coeur s'illumine

Des perles que versent tes yeux.

II

Je sais que ton coeur, qui regorge

De vieux amours déracinés,

Flamboie encor comme une forge,

Et que tu couves sous ta gorge

Un peu de l'orgueil des damnés;

Mais tant, ma chère, que tes rêves

N'auront pas reflété l'Enfer,

Et qu'en un cauchemar sans trêves,

Songeant de poisons et de glaives,

Éprise de poudre et de fer,

N'ouvrant à chacun qu'avec crainte,

Déchiffrant le malheur partout,

Te convulsant quand l'heure tinte,

Tu n'auras pas senti l'étreinte

De l'irrésistible Dégout,

Tu ne pourras, esclave reine

Qui ne m'aimes qu'avec effroi,

Dans l'horreur de la nuit malsaine

Me dire, l'âme de cris pleine:

«Je suis ton égale, ô mon Roi!»

廣田大地氏のボードレール研究サイト「[L'Invitation @ Baudelaire](#)」で廣田氏の個人邦訳「[悲しみのマドリガル](#)」が読める。参照されたい。」

岩波版新旧全集「詩」パート未収録の「芥川龍之介未定稿集」所収詩篇

「やぶちゃん注」以下の十五篇の詩篇（または詩篇断片）は、岩波書店一九六八年刊葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」の「詩」のパートに所収するもので、岩波版新旧全集の「詩歌」の「詩」の部分に所収しない詩を採録した。各詩の間の「○」は編者による挿入と思われるが、配しておいた。何故なら、詩篇の間には「○」のない箇所があり、これはその詩篇群が一つの纏まりであることを指すものとも思われるからである。

なお、これらの中には新旧全集の書簡及びノート類のパートに別載する可能性もあるかとも思われるのであるが、現在、それを精査する余裕がないので、かく標題した。重複するものを発見された方はご連絡戴けると、恩幸これに過ぎたるはない。」

○

zwi zwi zwi tsu zwi tsu zwitser zwi……

サモワルは暖し鈍銀に輝きて

我等の紅茶々碗もほのかなる

レモンのほめきにみちたり

ヴェランダの手すりにはえるばらは

よろこびにされど又微なる怖に

小さく紅き唇をふるへり

「やぶちゃん注」最初の英文文字列は不詳。オノマトペイアか？」

○

おれの想像

日光の中へ、高々と。

おれは蛾だ。燈火の戀人だ。

○

「わづらひはわが世に多し

いかにせむ うつし身のわれ。」

すべしらにかくこそ折れ

夜のほどろ蠹をたきつつ

繪にしたるマリヤのみまへ。

うらわかきぬかをぬらせば

汗もげにくゆらむものか。

世にありてはたとせあまり

みつと云ふサンタマルガリタ

みだれたる髪のがねに

おちし灯の光あはみ

裳は紅き絹ささべり

ぬば玉の黒天鷲絨も

らうたげにひきはへたりや

うつつなき祈念のひとみ

ほのぼのと青きもかなし

.....

「やぶちゃん注…この最後の一行空けの中黒列は未完を現わす編者葛巻の記号である可能性が高いように思われる。

「サンタマルガリタ」アンテيوخアのマルガリタか？ [ウィキの「アンテيوخアのマルガリタ」](#)によれば、『マルガリタはアンテيوخア（現在のトルコ共和国・アンタルヤ近郊にあった町）生まれで、父はアエデシウスという異教の祭司であった。彼女はキリスト教の信仰を持ったため、父からうとまれ、養母と共に羊飼いをしながら暮らすことになった。オリブリウスという名の地方高官からキリスト教信仰の放棄とひきかえに結婚を申し込まれた。しかし彼女がこれを拒んだことから捕らえられ、拷問を受けることになったが、そこで多くの奇跡が起こった。たとえばドラゴンの姿をした悪魔に飲み込まれたとき、彼女が持っていた十字架によってドラゴンの体内が傷つき、無事に出てくることできた。マルガリタは『紀元三〇四年に亡くなったとされるが、生年は未詳であるから、この詩の人物（「はたとせあまり」）の同定の根拠にはならない。』『聖マルガリタ（マーガレット）への信仰は特にイングランドで盛んで、『二百五十もの』教会が彼女に捧げられている。民衆信仰では彼女は妊婦の守護聖人とされている。絵画では彼女はしばしば竜から逃れる姿で描かれている』一九六九年の典礼改革によって実在性が疑われる彼女は典礼暦からは削られ、公的な信心は行われなくなったが、『それでも民衆の中に信心が生き続けている。彼女は十四救難聖人の一人であり、ジャンヌ・ダルクに幻で現れたことでも知られる』とある。」

断章

ひとりあればさびしがるらむ
ほの青き空のかぎりを
しらじらと月こそあゆめ
ひとりなるわがさびしさ
ひとりあればはれるならん

.....
.....

「やぶちゃん注…この「斷章」という標題は編者葛巻の恣意的な標題である可能性が高いように思われ、また、この最後の一行空けの二行の中黒列も未完を現わす葛巻の記号である可能性が高いように思われる。それにしても、何故二行なのか？ 訳あつて示し得ない二行なのか？ 判読出来ない二行なのか？ ぐちゃぐちゃに潰した判読不能の潰しなのか？ 昔から感じ続けていることであるが、葛巻のすることは不審なことが多いことは、残念ながら事実である。それは実にこの「未定稿集」全体の芥川龍之介文献の一次史料としての資料価値を著しく下げてしまっているといつてよい。彼しか所持していなかった資料も多いというのに。誠に残念である。」

我が愛したるかの人のために

わが幸福なるおもひのために

かのひと

われら 流れゆく「時」をしらず

たゞ 限りなき「愛」を呼吸す

麥の足穂は うなづき

おち方の 寺の鐘 鳴る

「やぶちゃん注…以上、最初「Zw.」で始まる詩から、この「かのひと」まで、編者は大正元（一九一〇）年から大正三（一九一四）年頃の創作とし、「未發表」と記す。この年号は「かのひと」を絞るためには貴重である。」

遣羽子

夕けむる日かげを惜しみ
遣羽子に娘つどへる
簪の上はるばると
とびかふは羽黒つくばね。

むくろじに泥だみたる金か
中空なかぞらに舞ひつつ光り
羽子板へ

落ちやまず羽黒つくばね。

あが「生」の日かげを惜しみ
概念の遣羽子すなる
おろかさを晒ふがに
黄昏がるる羽黒つくばね。

つきそめていく時かへし
やちまたの雀色時
もとほればかなしもよ
ああ空に羽黒つくばね。

師走人ざはめきすぐる市いちなか中の
おうさくるさにたたずみて
言擧げすなる囃賣り

カンテラの煤け明りに高々と
から聲たてて呼ばふらく

「囃はよろし來年の
來年の囃はよろし囃召せ。」

されど人はとどまらず

白癩

人心ほのかに明く^{あか}

朝づきし昔かたりぞ

はれやらぬ霧もなびけば

去りがてぬ音もなづめば

ものみなの象^{かたち}を分かず

うそぶくは淵のみずちか

「やぶちゃん注…「白癩」は「びやくらゐ」(びやくらゐ)と読む。ハンセン病の一型の古称。身体の一部又は数箇所^カの皮膚が斑紋状に白くなるものを指す。」

白衣登料

かうかう澄める松の風

せんせん鳴れる瀑の音

峯のほそみち高だかと

のぼる白衣は誰ならむ

「やぶちゃん注…以上、「遣羽子」から、この「白衣登料」まで、編者は大正三〜四(一九一四〜一九一五)年から大正六〜七(一九一七〜一九一八)年頃の創作とし、「未發表」と記す。」

白鳥

日は沈んだ。風とは云へぬ程かすかな風が、黄ばんだ木の葉を渡つて来る。その木のかげを一つ曲ると、公園の池のほとりへ出た。お前は他の夕明りの中に、白々と一羽浮んでゐる。それが水の上に病んでゐるのか、何時まで見てゐても動かない。その時おれの心の眼には、月よりもほのかに明るみ始める——あのマラルメの秋の夢が。

「やぶちゃん注：編者は大正八（一九一九）年頃の創作とし、「未發表」と記す。」

FANTASHA

一

みたりの黒衣のひとありてわが前にうかび出でぬ。

さきなるひとりとは若き女にして、小さき機はたの上に座しつ、機には月の如く黄なると、日の如く紅なると、二すじの糸たれたり。

中なる老いたる女は、すでに織られたる布を双の手に捧げて、あまれるは長く地にひきつ。布は濃藍こあゐと素黒すにて描ける、渦輪なりき。

あとなるひとりとは面をだに見せず、黒き衣を頭よりうちかづきて、唯めてのみを露しつ。其手にとられしは、しろがねの如く輝ける缺なりき。

たちまち、風のふきわたるやうな聲して、——みたりは霧の如く消えぬ。

二

夏の夕なり。病める翁ありて、とある無花果のかげに座しつゝ、路ゆく人々に糧をもとめぬ。されど何人も此翁をかへりみざりき。

空は白き葡萄の酒をたゝへしやうにくれて、無花果の葉かげも暗うなりぬ。しかも翁はなほ座して人を待てり。たちまち、ひとりの女ありて、翁の前をよぎりぬ。

「我飢多ぬ、物たびたまはずや。老いたる病う人の爲に。」かすかなる聲して云ふ。

女は顧みつ、携へたる籠の中より、熟せる棗をとり出で、與へぬ。「しばらくの飢をしのがせ給はむ料にこそ。此外にもなければ。」

「かたじけなし。」翁はわづかに頭をさげぬ。

「われ渴きぬ。水くみてたまはずや。」小さき、壺をとり出でつゝ、再かすかなる聲にて云ふ。

女は快よくいらへて、高き蘆と低き柳とをわけつゝ、清き河の水を、あふるゝばかりにくみぬ。

「干したまへいざ、」 壺を翁の手に與へて云ふ。

翁は靜に、立ち上りつ。歩いて無花果の下を出でぬ。月のぼりて光、水の如く、其白き髯を、皺ばめる面を、長きにび色のきぬをぬらしたれども、翁の影はたえて地の上に落ちざりき。

「女よ、爾の上に榮あれ。」 翁の聲は遠なりのかみの如くびゞきぬ。女は驚きて翁の顔を仰ぎ見しが其火の如くびらめける眼に恐れて、あはたゞしく地にふしぬ。

「我爾につげむ。爾が老いたるかたいに與へたる、棗をはまば爾は、富と譽とを得む、爾が老いたるかたいにめぐみたる水をのまば、爾の子は多くの子の父とならむ、爾自ら選ぶにまかせよ。」

「願くは水をこそ。」 女の聲はやさしかりき。

翁、再びどよもし答ふ。「幸なるかな愛ある者、爾は SOLOMON が智を願ひたる賢しきよりも賢し。爾が子は、爾が國の民の父とならむ。爾の子の上に賀さかあれ。」

女は漸、頭をあげぬ。而して翁のすでに去りて、唯、晶の如き水をたゝへたる壺のみ、無花果の下かげにのこれるをながめぬ。

かくして、わが ZOROASTER は生れぬ。

「やぶちゃん注：」 の下に続く文章は底本に従い、半角の空欄を入れた。編者は大正四(五)一九一五(一九一六)年頃の創作とし、「未發表」と記す。」

その子うまれて三日の夜、……

その子うまれて三日の夜 母なる人のおこたり

戸をとぎすをわすれて いねぬ 夜ふけて月の光窓よりしのび入りて 幼な兒の蝨をぬらしつ
家のうちはなべてくらく まごろめるごとく かすかなりしが 幼な兒の白き襦のみは ほのか
なる月の光に青みて 夢もまた 琅玕の國にやさまよひけむ その夜より 幼な兒の蝨は 月のか
なしみやどして なめ石の如く かくひやゝかになりまさりつ くちづけし月もさびしく 青み
けむ ——

うつむける 君が片頬かたほの さびしくも 思はるゝかな 夕月の夜は

「やぶちゃん注：編者は大正三〜四（一九一四〜一九一五）年頃の創作と記す。」

涼 味

スフィックスの頭上に腰をかけて、空を仰ぐ。雲はない。空は、澄みに澄んで、深い碧瑠璃の様。
砂漠の末から歌の聲が起る。四方は静だ。時々、椰木のさやさや月にさゝやく外に聲はない。歌の
聲が折として、激調にふるえる。と、ナイルの流に浮であた、月影がくづれる。 歌が完る。月が
やゝ傾く。 砂山のむこうで獅子が吼えた。

「やぶちゃん注：「さやさや」の後半は底本では踊り字「へ」。編者は大正元（一九一〇）年頃の創
作と記す。有意な字空けは底本のママ。」

序（断片）

おれは暮方の窓の側に、さつき一人空を仰いでゐた。仄かに青く澄み渡つた空には、疎な星屑が光つてゐた。その空の下に起伏する、數限りもない瓦屋根——其處からかすかに立ち昇つて來るのは、運河が晝の熱を返す水蒸氣の影であらうか。それとも東京に住んでゐる無數の人間の吐息でもあらうか。さう云へばおれも空を見ながら、思はず長い吐息をした。微風に動いてゐるレエスの窓掛け、窓框に並べた忘れな草の匂、それから靄に沈んでゐる遠い寺々の梵鐘の音——すべてがおれと同じやうに、やはり吐息を洩らしてゐるらしい。

するとおれのすぐ側で、誰かが又長い吐息をした。部屋の中には夕闇が、とうに薄々と流れてゐる。壁に懸けたモナ・リサの晝も、あのほほ笑みは云ふまでもなく、かほ顔貌さへはつきりとは見分けられない。が、おれがあたりを見廻すと、おれの足もとの床の上には、雪のやうな毛を朧めかせた獏が一匹横はつてゐた。獏は前足を揃へた儘、石灰の火に似た眼を舉げて、窓側に立つたおれの顔をじつと見上げてゐるのである。おれは半ば身をかがめて、その頭を撫でながら、獨り言のやうにかう聲をかけた。

「獏よ。お前は何が欲しいのだ。お前の眼には何時になく、饑の蝨が燃えてゐるぢやないか。」

獏は思ひがけなく人の如く、悲しさうにこんな返事をした。

「私は夢が欲しいのです。東京の町には何處へ行つても、小供の夢さへ見當りません。どうかあなたの夢を食べさせて下さい。さもないと私は今夜中に、翅を焼かれたひつむし蛾よりも、脆い死方をしてしまふでせう。」

おれは……

「やぶちゃん注：この「断片」は勿論、編者のものであろうが、この「序」というのも何だか怪しい。とりあえずはそのままとしておく。編者は大正八（一九一九）年頃の創作とし、「未發表」と記す。」

鯨 ballade

空かきくもりそよ風に、埃たちまふ夏の夜半。闇とひとつに煙りつつ、ゆらぐともなき古暖簾、くぐれば暗き電燈に、あやしき鯨ぞならびたる。まぐる海苔まき鳥賊さより、小鯨しら魚鴉貝、あるは赤貝えびびらめ、みな酸の香にいきれつつ、吐息もすらむけはひあり。と見ればひとつ大いなる。手こそは來れ鯨の上に。鯨はしみらに蠢きつ。まぐる海苔まき鳥賊さより、小鯨しら魚鴉貝、あるは赤貝えびびらめ、ぬらめきわたり饅えわたり、燐の光ははなてども、手はつかみ去る鴉貝。ああこもとに死たやある。鯨はしみらに悲しみぬ。まぐる海苔まき鳥賊さより、小鯨しら魚鴉貝、あるは赤貝えびびらめ、汗ばむ肌もふるへつつ、蛙めきたる音おに泣けば、今ぞ見え來るそが上に、睫きしらぬ顔ひとつ、……

「やぶちゃん注…編者は大正八〜九（一九一九〜一九二〇）年頃の創作とし、「未發表」と記す。先に掲げた「怪談」は、これを分かち書きにし、口語風に現代詩化したものである。

老婆心乍ら、「小鯨」は「こはだ」と読み、「しみらに」は「終しまらに」という副詞で、一日中、間断なく。絶えずひっきりなしに、の意。」

幽 靈

蒼白いお前のすがたは、何時となく私たちの部屋へはいつて來る

お前は何が欲しいのだ

私の愛か それとも又 妻の愛か

しかしお前は 私の間に答へない

さうして唯 部屋のすみにたたずみながら、おごそかな眼で しづかに私たちを星のいぶきのやうなお前のすがたの向うに 窓かけのわすれ草をちらつかせながら

（七月十一日）

「やぶちゃん注…編者は大正九（一九二〇）年頃の創作とし、「未發表」と記す。」

やぶちちゃん版芥川龍之介詩集 完